

特集 地域住民の反対運動を通じて

～当事者の隣りにいる立場として～

現在松山市では、通所授産施設と地域生活支援センターの建設をめぐり、地元の一部住民から反対運動が起こっています。以前から建設予定地を公園にしたい、という住民側の要望もありましたが、「何かあった場合誰が責任を取るのか」「他にも市有地はあるのになぜこの場所を選ぶのか」などといった精神障害者への誤解や偏見からくる声が強くあります。

これまで愛媛県では地域の作業所、グループホーム等の施設建設において今回のような大きな反対運動にはなりません。この反対運動を受けて、精神障害者に対する誤解や偏見の根強さを改めて強く実感しました。これを機会に、地域に対する活動を振り返り、この現状をどう捉えるか？今後精神保健福祉士としてどのような活動が必要なのか？皆さん一緒に考えましょう。

経過レポート

支援センターが欲しい！

平成6年松山市障害者福祉計画策定委員会に松山市精神障害者地域家族会明星会が委員として出席し、平成7年松山市障害者福祉長期計画が策定された。24時間対応してくれる場所、いつでも行ける場所、働く場所が欲しい……。障害者や家族のニーズはたくさんあるが、現在の作業所だけでは担えきれない。充実したサービスやそのサービスを提供できる場所がたくさん必要である。障害者のためだけでなく、みんなのこととして地域作りを考えなければならない。家族会が施設運営に苦慮するのではなく、市民とともにみんなが安心して暮らせる地域を作るための基盤作りを目指し、平成10年明星会総会で社会福祉法人の設立に向けての合意を得た。同年松山市で障害者プランが策定され、地域生活支援センター（1ヶ所）、通所授産施設（1ヶ所）が平成14年度の数値目標として掲げられた。

思いがけない反対運動

平成12年12月6日から平成13年1月13日までの間に建設候補地の地域住民に対して松山市が説明会を計10回行った。その中で精神障害者がおかれてきた歴史、誤解や偏見がたくさんある現状、社会復帰施設の必要性を説明した。しかし住民の不安は予想以上に大きかった。「怖い」「何かあったら誰が責任をとるのか」「絶対に反対。話にならん、もう帰ってくれ」……。精神障害への無知を改めて感じさせられ、誤解や偏見の根強さを突きつけられた。

12月27日の愛媛新聞に『隣接幼稚園は反対運動』の記事が掲載された。「安心して子供を通わせられない。」と、幼稚園の母の会が中心となり、反対の署名活動が始まった。この動きに当事者からは「なんで反対されるんやろう」「住民の人に直接話をしに行こうか」「作業所を見学してもらったらわかるのに・・・」「市長や園長に会いに行こうか」という声がたくさん出た。「悔しくて立ち上がれなかった」という当事者もいる。作業所、グループホームでも地域の偏見を取り除くために自分たちでできることを話し合い、動き始めている。

「知ることから始めて」

作業所では、市民との交流を深めるためのクッキー教室やイベントを開催した。平成13年1月から3月、市民ネットワーク『松山・精神障害者の社会参加を進める会』（通称：ほっとねっと松山）が主催し、市民を対象に精神障害者の理解を深めるための「ほっとねっと講座」（全4回）を開催した。

講座の宣伝をかね、ほっとねっと松山の会員がテレビに出演し、講座のお知らせや精神障害者への理解について話をした。これをきっかけに講座に関する問い合わせのみならず、精神障害についての相談が多くあり、あまりの反響のすごさに驚いた。同時に一人で抱え込んでいる人がたくさんいることや情報不足を実感した。心の健康について考える講座や場作りが必要であることを改めて考えさせられた。

マスコミでは、愛媛新聞で2月14日から22日の間「知ることから初めて」～精神障害者への偏見をなくすために～が計9回連載された。CATVはその後追跡取材をし、特集が3回放映された。

市民の反応とこれから

反対の声ばかりではなく、反対運動の記事を見て「何かできることはないですか」と訪ねてきてくれる人や「施設建設に協力したい」と言ってくれる人も何人か出てきた。1月から精神障害者問題を考える学習会を開催し、ボランティア活動や市民活動をされている方々、当事者や家族、関係者の方々が個人の立場で精神障害者を取り巻く問題を一緒に考えている。心の健康を考えながらまちづくりを実践していくために松山市全体の普及啓発に取り組むことを話し合っている。

隣接幼稚園では、職員が高知市の授産施設を見学した。3月21日の卒園会で「これからは思いやりの精神を持って接しなければならない」と園長は挨拶をし、保護者も反対署名活動を中止することに納得した。幼稚園の反対運動は中止されたが、地元住民の建設反対の意見は変わっていない。そんな中で隣接地域の住民有志の方から「話し合いの場を持ちたい」という声があがり、3月24日には住民有志が考える集いを開催し、明星会から当事者、家族、スタッフ、また支援者が出席し話し合いをした。今後も地元住民との話し合いは継続し、市民を巻き込む活動はどんどん展開していく。

レポーター：明星会 村上佳芳里

対象者の声は？

豊岡台病院 白石 文

H13年3月21日の愛媛新聞により、署名活動中止が掲載されていました。愛媛県でPSWとして働いているのに大変恥ずかしいことですが、今回この依頼がくるまで全くこの問題について耳にしていませんでしたので、新聞記事を送付して頂き驚いたと同時に動向が気になり、注意して新聞に目を通すようになりました。今後も状況はどんどん変わっていくと思いますし、施設建設が持ち上がるまでのプロセスも理解できていませんが、現時点での私なりに思ったことを書かせて頂きます。

PSWは対象者の声もご家族の声も直に聞くことができますし、そしていかに社会復帰施設が必要であり切望しているのかも理解していますが、果たして地域住民の皆様にもその声は聞こえているのでしょうか？

今までの新聞記事を読んで「何故社会復帰施設が必要なのか、対象者がどれほど必要としているのか」が書かれていないの难道う？

と、とても不思議に思いました。市と地域住民の皆様の声が前面にでて、対象者の声はほとんど記載されていないのです。

PSWが対象者の人権擁護を唱えるように、幼稚園の保護者は子供たちを守りたいと思います。それがいいことであるとか、悪いことであるとかではなく、それぞれがそれぞれの立場での意見があると私は思います。

今回のことでも、実際入園児の数は減るかもしれません。それに関して『偏見があるのがおかしい！』『対象者が地域で生活するのが何故悪い！』等と思うのではなく、事実として受け止めることが必要ではないでしょうか。入園児の数は減っても、隣に社会復帰施設が建ち偏見が不必要であることが判り、又判っていただく努力をすることで、時間がかかっても、地域に溶け込む事はできるのではないのでしょうか。

何も無いところに何かを作るのには、相当の時間が必要であり、対象者の声をもっと出

すべきではないかと私は考えます。『対象者が失敗をしながらでも地域で生活できるようになる。』そういう力を持っていることが判っているからこそ、社会復帰施設が今必要でありますし、それを判っていただく努力をすることが大切なのではないでしょうか。

今回改めて偏見の強さ等を考え、地域住民の皆様の思いを考慮した上で、お互いが納得できる話し合いでの解決を願い、PSWとして、どうすれば地域住民の皆様と対象者が交流することができ、対象者の声をたくさん聞くことができるか、更に経験し考えていきたいと思います。

松山市の社会復帰施設反対運動について

思うこと

今治市地域生活支援センターときめき 河野聡子

さて、これを書く前に一言お断りをしなくてはならない。標記についての意見を行政の立場で書いてほしいとの依頼であったが、実は3月いっぱい県職員をやめることになった。だから、皆さんのもとにしぶしぶ通信が配られる頃は、私は行政からちょっとだけ離れたところにいる。

しかし、気がついたら約16年行政（保健所と精神保健福祉センターなのですが）にいた。私が保健所に就職した頃は、家族会も県下に数えるほどしかなく、そして作業所は明星共同作業所というのがあるらしい、そのうち新居浜と大洲にできたらしいといった状況だった。現在の久万支所が私のはじめて勤めた保健所なのだが、メンバーに提供できるサービスは保健婦の訪問と週1回のソーシャルクラブ（多くの保健所はデイケアと呼んでいる）だけだった。その頃から考えたら、家族会ができ、作業所ができ、グループホームができた。ボランティアグループもできた。たくさんの方が精神障害者の問題を考えるようになった。

明星会は、県下の家族会の一歩前を歩き、パイオニアとして未来を切り開いてこられた。今回の反対運動も、大きな試練ではあろうが、きっと克服して前に進んでいけると

思う。ご家族が何もいないところから作業所を作っていたことから始まり、現在に至るのだ。

思えば、私も家族の方々、当事者の皆さんにたくさんのことを教えていただいた。「飲んでますか（薬）？病院にいらしてますか？」としか言えない未熟な保健婦だった私。この人たちに自分は何ができるのだろうと考えてもなかなか答えが出なかった。その頃保健所の事業で家族教室が始まった。事業の目的もはっきり認識することもできないまま、とにかく参加されているご家族の辛い体験談を居たたまれない気持ちで聞いていた。話すことでご家族は少しずつ元気になっていかれた。私達スタッフも少しずつ辛くなかった。家族会やメンバーといっしょに総会をしたり、バザーを体験したり、作業所作りをしたり……。しんどいけど楽しいことも増えていった。保健所として、精神保健事業をどのように展開していくのか、行政として何をしなくてはいけないのか、行政の立場で何ができるのか、最近になってやっと考えられるようになったように思う。

さて、話を松山市の社会復帰施設反対運動についてもどす。この件について、中予地区の地域部で話し合った。最初に、明星会の職員の澤田さんから、経過についての説明があり、明星会の職員が時間をかけて理解を求めていく活動を地道に進めていこうと話し合っていることなどの報告があった。この問題が私達精神保健福祉士にとってとても重大な問題であるということは、参加者の共通の認識だったと思う。しかし、精神保健福祉士としてこの問題に対し何ができるのか、何をしなくてはならないのかはわからずにいた。

話し合っていくうちに、他人事ではなく、私達一人一人に突きつけられている問題だということが、少しずつわかっていったように思う。私達精神保健福祉士として、何ができるのか、何をしなくてはならないのか、その答えはきっと一人一人の脳裏にうっすらと見えてきたのではないかと。私が思ったのは、私がかかわってきた仕事一つ一つについて、真面目に、やれることを、きちんとやってき

たかどうか、ということが今問われているのではないかということだった。はっきり言って私の中にも偏見はある。面倒なお隣さんより、問題であっても、顔が見えて、どこか憎めないところがあって、支えている人がたくさんいたら「しゃあないか」って思うかもしれない。私は「しゃあないか」っていつてもらえるような仕事をしてきたのかな？やれることはきちんとやってきたのかな？

面倒なお隣さんなんて、失礼なたとえ方をしてしまったが、家族やメンバーは本当にがんばっている。保健所を訪ねることなど本当に勇気のいることだったであろう。私達もそれに見合うような仕事をしなくては。しかし、一人一人が別々にがんばったところでできることは限られている。しっかりとアンテナを伸ばし、情報をキャッチしながら、ネットワークをつくっていくことが必要だろう。私達にできることはきっとある。

住民の反応に思うこと

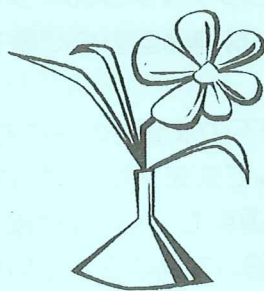
援護寮曙荘 内藤 真治

松山市畑寺で起こっていることについて、そこにある深い個別の事情やニュアンスなどはわかりませんが、新聞や人づてで得た情報を元にして私個人が思うこと、あくまで私見として考えたことを書かせていただきたいと思います。

まず、幼稚園保護者より反対署名運動について配布されている文章を見たとき、大きな偏見を持って行動されているという印象を持ちました。特に気になる点として、『自分たちは決して差別をするわけではないが精神障害が知的障害や身体障害など他の障害とは違い、それによりいろいろな事件を引き起こしている。精神障害者が問題を起こさないという保障はなく、何かあってからでは遅いと心配しての運動である。精神障害者に適した立地条件の場所は他にあると思う。(要約)』と、差別してないと言いつつ差別しているような主張をしておられることがあります。この点については、全ての精神障害者が特別高い確率で犯罪を起こす因子を潜在させていると訴えているようで嫌悪感を覚

えました。しかし、精神障害とそれを抱えて生きている方たちの実際の生活というものをよく知らない、親という立場にあればそう考えるのも無理からぬことだとも思いました。昨今世間では社会問題としても取りざたされている、強度のストレスや不安から心神喪失状態となり引き起こされる犯罪が、精神鑑定などの関与もあって、俗に『精神障害者の犯罪』という全ての精神障害にかぶさるようなイメージで過剰にマスコミから報道されていること、また精神医療の歴史的背景から多くの精神障害者が居所を社会と隔絶した病院の中へ押し込められ、地域住民とのふれあいの機会を失っていて、結果、精神障害者が地域住民からみれば畏怖の存在となってしまうこと。精神障害に対する無知をもたらした状況と、その上での一方的な危険性のみ特化されたような情報が、今回のような反対運動推進者の皆さんの価値観を決定的に形成させ、その不安感などをあおっているのではないかと考えました。

人は、与えられる情報によってどのようにでも価値観を変化させ、それを行動に反映していくものです。反対運動の中心におられる保護者の皆さんは、おそらく精神障害というものについて正しい情報を得る機会に巡り合わずこれまでいたのでしょう。私の友人など周囲の人たちの話を聞いても、『反対運動止む無し、精神障害者はやはり危険なイメージがある』とする方が多数です。かくゆう私自身もこの分野に進もうと自ら考える以前は全く無教育の状態でした。それだけ特別なものになっている精神障害者を巡る情報を、当事者の傍らにいる私たち精神科医療・福祉従事者が、どれだけわかりやすい考え方と言葉で社会に普遍化していけるか、私たちが果たすべき役割は大きいと思います。



全国の動き

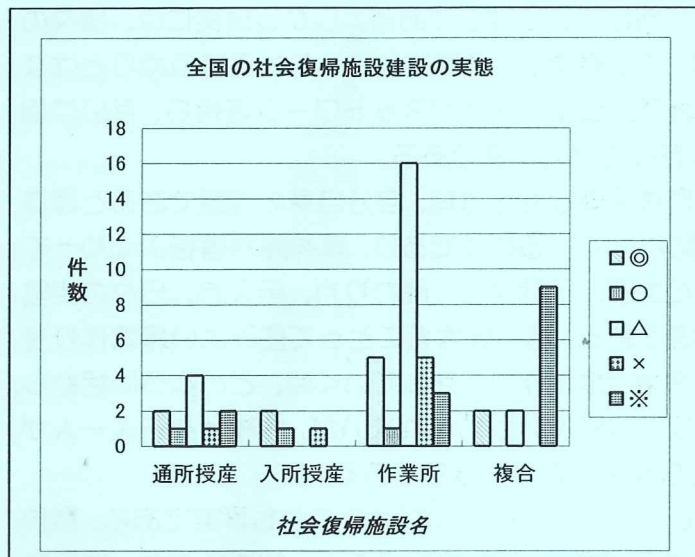


毎日新聞の調査では……

精神障害者の社会復帰施設や作業所、グループホーム等の新設に地元住民の反対が89～99の10年間に全国で少なくとも83件、延べ107施設で起きていたことが調べでわかった。このうち計画通り設置できたのはわずか2割であった。予定より1年以上遅れて「さくをつける」「送迎を徹底する」等の条件つきで設置にこぎつけたのが約1割の9件であった。

【毎日新聞ニュース速報 1999年2月27日より抜粋】

その調査のうち4つの社会復帰施設等に関してグラフにしたものが左記にある。どの施設も計画通り設置できたのは少数であり“1年以上遅れ条件つき設置”を含め建設が難航したケースが大半を占めていた。



◎＝計画通り設置
○＝1年以上遅れか条件つき設置
△＝場所変え設置か設置後移転
×＝凍結か断念 ※＝継続中

生活支援センター不許可に抗議in京都



平成12年秋に、京都NPO法人が初めての事業として、京都市内に「地域生活支援センター」を建設しようと、地域への説得活動を1年間にわたって行った上、京都市建築課に建築確認申請をしたところ不許可となった。

「地域支援センターが建築基準法の省令（平成7年）にでていないことによる」という理由で、建築可能なのは援護寮のみということ。しかし、この省令は平成7年の省令であり、地域生活支援センターの法令化は平成12年。厚生省令にそった建築基準法の省令が対応していないため、京都NPO法人は1年間の労力と200万円余にのぼる不用な借財を背負い、借地の本契約も済んだ1ヶ月後、地域生活支援センター建設撤退を余儀なくされた。なお、この建物の建設費の助成については厚生省、京都市が4分の3の予算化をしており、役所の縦割行政の弱点を露呈した。（情報誌「レビュー」より抜粋）

ま と め

今まで仕事をしていくうえで精神障害者に対する偏見に直面することは度々あったが、今回のような反対運動に遭遇したのは初めてである。我々の『地域』での活動を見直すと、結局精神障害者と何らかの形で関係している人（家族、保健婦、病院、当事者、ボランティア etc）との活動を『地域での活動』と位置付けてきたのではないだろうか。『地域』を考えたときに『近所のおじさん、おばさん』ということまで考慮にいれて働きかけているだろうか。全く精神障害者と関わったことのない人たちに対するアプローチは充分できていると我々は胸を張って言えるだろうか。

今回のできごとは『知らない』ということが偏見を助長して、報道機関の精神障害者に対する偏った報道が危機感を喚起し起こったと考えられる。精神障害者のことを知らない人たちに対してもっと『知ってもらう』ための活動が必要であり、このような現実に対し、精神保健福祉士、その他の関係者は『このままではいけない』と感じているはずである。しかし現実には、個々の活動や各地区での活動はそれぞれ行われているが、県単位、国単位といった大きなうねりとはなっていない。個々の活動では限界がある。愛媛県支部及び協会がネットワークを持ち、互いに協力して、精神障害者と地域の住民との橋渡しをしていくべきである。

これは決して一部の地域の問題ではなく、精神保健福祉士は皆、自分自身の問題であると認識しなければならない。我々は日々、当事者と関わっているわけであり、精神障害者をよく知っているもっとも身近な『市民』だからである。だからこそ我々の『関わり方、伝え方、日々の姿勢等』が問われている。今回の件はある意味好機である。精神障害者にとって住みよい環境作りを展開していくために今までの活動を見直し、今後『地域作り』をしていく時、どのように活動していけばよいのか。この特集で答えを導きだすには程遠いかもしれないが、今後我々一人一人が実践の中で常に意識していれば、少しずつでも答えに近づくはずである。

今回の件については、好意的な関わり等をしていただいた方々がいたことも事実である。精神保健福祉士として、協会員として問題を意識すること、対策を考えること、解決に向かって行動することを忘れてはならない。

特集担当編集員一同



こちら地域部！

東予地区

東予では全 4 回、地域部会を行いました。その内の 1 回は部会内容の検討でしたので、実質は年 3 回という非常に少ない会になってしまいました。

しかし、内容としては毎回の病院見学、事例検討、「自己決定について」「開放処遇について」の意見交換等、1 年目にしてはまずまずの展開でした。参加者も東予全 20 数名の会員の内、毎回 14 ～ 5 名の参加があり、東予会員の意気込みも感じられたように思います。

毎回思うことですが、地域部会のメリットは日頃業務で顔を会わせる人たちが顔を突き合わせて気軽に話ができるところではないでしょうか。充実した検討内容にしながら、なるべく 1 年目の人も積極的に参加でき、活発な話し合いができるような雰囲気作りを心がけていたつもりです。

今年は会が終わるたび「次のテーマは何にしよう？」と思いつきのように地域部員が頭をひねってテーマを決めていた所がありました。また、会員に事例のお願いをするのも直前になることが多く、「地域部会のことなんですけど・・・」と話し掛けると皆さんにかなり嫌な顔をされてしまいました。

来年度はもう少し会員の要望を取り入れ、一貫性のある会にして行かなければなあと考えています。

(花工房 安達 友貴)

中予地区

「地域部ってなに？」から始まった地域部の活動。何をどう進めたらいいのかを話し合うことから活動が始まった。中予地区の特色を活かして学習を深めること、PSW 通信や役員会報告などを読み返し、全国レベル、支部レベルの動きについて理解を深めることなどを基本に考えていったが、わが中予地区の特色ってなに？というところでまたまた議論が紛糾した。話し合いの結果、とにかく中予地区は様々な機関所属の会員がいる。病院も数が多く、お互いの活動を知らないまま(知るといふ努力をしないまま?)、日々の活動に流されている。お互いの活動を様々な切り口で紹介し合いながら情報を共有するとともに、自分達の活動を見つめる機会にしようと思った。

「医療の窓口を考える」「倫理綱領について」「デイケアを考える」「松山地区の社会復帰施設反対運動について」等をテーマに話し合いを持った。反応は様々であったが、自分達の仕事に対する姿勢を省みる一つの機会にはなったのではないかと考えている。しかし、未消化のまま話が終わってしまったテーマもあり、できれば次年度も同じテーマを取り上げて継続的に話し合っていくといいなと思ったものもあった。できれば、会員同士が日頃活動の中で悶々としていることをお互いに話せる場所になればいいなと思う。(元松山中央保健所 河野聡子)

南予地区

地域部は今年から新しくできたので、何をどうしていいのかわからず、頑張りました。みなさんご苦労様でした。

内容は、本協会・支部役員会との連絡調整、地域のトピックス、今困っていること等、定例会の報告も入れました。そして 1 番頑張った内容は『日本精神保健福祉士協会倫理綱領(案)』でした。この倫理綱領の話をしていると、それぞれが抱えている PSW としてのいろいろな問題や悩み(地域性も含めて)が話し合えてとても良かったんじゃないかと思いました。

ただ、やっぱり南予は高速も通っていないので出席率がよくない。でも自分達の倫理綱領としてみんなに考えてもらいたいということで、大洲・八幡浜地区、宇和島・御荘地区に分けて開催してみたところ、沢山の会員さんに出席してもらうことができました。やはり遠いとなかなか出席できないようです。

来年はもっと沢山の会員さんに「参加してよかった」と思われるようになってもらいたいと思います。

(平成病院 中村 玉季)



一泊研修会報告

きらめいて^{うみ}海峡 かがやいて PSW

2001年3月31日～4月1日

サンライズ系山にて

財団新居浜病院 星加三枝

2000年の中四国精神保健福祉士<PSW>大会が新居浜で行われ、テーマであった『精神保健福祉士<PSW>の専門性を考える』を本年の一泊研修にひきつげればいいなあとの思いで中四国大会実行委員を経験した会員を中心に一泊研修部会を進めていきました。

研修内容を決めるにあたっては、まず、部会内で各会員の研修への期待や何を学びたいかを出し合いました。愛媛県支部設立までの歴史について、①無資格時代のPSWと資格ができてからのPSWとでは何が違うのか、②他職種の資格取得者とPSWとどこがどう違うのか等をベテランのPSWに講演してもらいたいという意見が出ましたが、ただ講演を聴くだけでは今後の各自の活動につながりにくいし、グループトークで意見を広げてもテーマが分散してしまいそうだという事で、今回の内容に決まるまで部会内での熱い思いを語り合わされてやっと決定しました。

研修日時を何回か変更し、結局皆様の都合の悪い日と重なってしまったことが一番残念でした。参加者は20数名で、1日だけの参加の方も数名いました。

研修場所は、井上研修部長の勧めで「サンライズ系山」でした。目前に「来島海峡大橋」をパノラマで一望でき、美味なる旬の素材の会席料理は絶品でした。心配だったお天気は、午前中で雨も上がり、太陽がきらめき、潮風を感じて日本で初めての海を渡る自転車道のサイクリングを体感できたことは一生の思い出に残るでしょう。

今治市精神障害者地域生活支援センターが4月1日開所式を迎え、今治市の保健婦さん方より、今治市（今治地域）の取り組みについて話を聞ける機会がもうけられよかったです。平成14年度からの市町村の在宅精神障害者の支援施策実施に向けて、地域との連携を目指した活動がPSWに期待されていることを実感し、1人1人が今後の活力にし、努力していければと考えています。



一泊研修に参加して

真光園 法野美和

久しぶりにみんなで集まったような研修でした。一日目の今治市の保健婦さんからの報告では、地域生活支援センターの開設に至るまでの関わりや関わる中での思いを話していただきました。

各地域でもさまざまな動きがありますが、松山での自分のやっていることと比較しながら話を聞きました。どこも地域の住民の方との連携が大きな力になっていると感じました。二日目はグループワークで、前半に病院ワーカーの役割ということで二人、後半にデイクアって何？ということで二人の発表があり、それについて意見交換をしました。はじめはなかなか意見が出ませんでした。日頃の不安やもどかしさを吐き出し、考える機会になりました。表面的なことではなく、業務をしている意味、例えば何のために家族教室や作業所に関わっているのか、地域の中で自分の役割は何なのか、今のデイクアの問題点は何なのか、それをどう解消すればいいのか、そのためにワーカーは何をするべきなのか。私ももやもやしたものはあるのですが、うまく言葉にできませんでした。いかなあ。発表していただいた四人の方、すみません。そしてありがとうございました。人数が少なかったのですが、かえって全体でそういう話ができたこともよかったと思います。最後に、夕食が超豪華だったこと、懇親会でもかなり盛り上がったこと、景色もすばらしかったことで日頃のストレス解消もできました。担当の東予の皆さん、ありがとうございました。



(なごやかトーク懇親会風景)



トピックス 障害年金の話



20才前の発病、20才以降の初診であり、初診日に納付要件のない場合の救済措置として

- ①医師にかかれていないやむを得ない事情が明らかな場合（単身でアパート等に住んでいた等）
 - ②20歳前に発病していることを推認する医師の証明があること（医師の証明以外は認められない）
- の要件を満たす場合、H7年12月より20才前の初診と同様に扱う措置がとられています。

愛媛県においては、11年末頃より、本人、家族に対する面談調査が重ねられた結果、納付要件なし（やむを得ないとは認められない）との結論に達したケースが続き、支部内でも問題としていました。

その件について、非公式に社会保険事務所の取り扱い、考え方を聞きました。

- ・その時期に、国から条件の確認作業を確実にこなうよう指導が降りてきたことは事実。
- ・現実的に愛媛のケースにも、中にはずさんな説明の申請、明らかに不自然な申請があったようです。

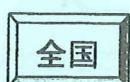
以前より厳しい見方がされると思いますが、適切な説明があれば認められます。例えば絶対別居状態でなくてはいいと考えているのではなく、不登校、閉じこもりなどから始まり発病に気づかなかったケースや、近くにいたが本人が家族との接触を拒否し続けたため発見が遅れたケースなどについては、やむを得ない状況と認めれば柔軟に対応する所存とのこと。申請する際に発病日を推認した根拠をできるだけ説明すること

発病して受診できなかった理由、経過を明確にすること
などに特に気をつけることだと思います。



第3回国家試験結果速報！！

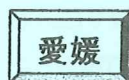
3月30日に第3回精神保健福祉士国家試験の発表が行なわれました。当支部会員も7名が合格されました。おめでとうございます。では、全国、愛媛の状況を報告します。



全国	第1回	第2回	第3回
受験者数	4866名	3535名	4282名
合格者数	4338名	2586名	2704名
合格率	89.1%	73.2%	63.1%

受験資格別	保健福祉系大学卒業者	養成施設卒業者	実務経験5年以上
	426名(15.8%)	653名(24.1%)	1625名(60.1%)
性別	男	620名(22.9%)	女 2084名(77.1%)

*合格率は、回を重ねるごとに下がってきています。4回、5回は50%台、40%台となり、それ以後は、社会福祉士の合格率と同様(20%台前半)となるといわれています。現在の登録者数は6636名(H13年2月末現在)で、今回の合格者を入れると9000名を超えることになります。



*合格者数	31名
うち 県支部会員	7名
養成施設卒	2名
救護施設	3名
保健婦	15名
病院看護婦	2名
不明	2名

新人紹介（今年度の新入会員です。ご紹介が遅れ、申し訳ありません）

山口 奈々絵 《牧病院》

和田 早織 《黒田病院》

前原 優子 《松山記念病院》

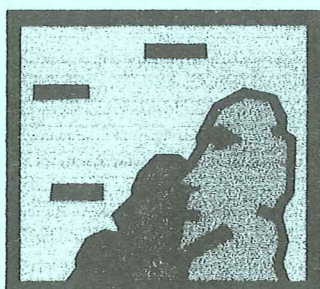
以上の3名を含め、今年度の新入会員は8名でした。

3年間広報出版部で活動し、年々試行錯誤を繰り返してきました。おかげで初期と比べると格段に内容が濃くなったなーとしみじみ思います。当然、労力が違います。企画の話の壮大さにのまれ、思考停止に追い込まれたこともしばしばで、いかに普段何も考えていないかを思い知らされました。しかし、結構しんどい思いをしたからには、何か得たものがなければもったいないと貧乏性の私は思います。で、何を学んだかを考えると、「行動するときには明確な目的をもって行動すべきである。自分の意見を明確にしてそれを出すことを恐れるな！」です。小心者なので何か発言することには常にびびっていますが、これからは少し図々しく発言できる・・・かな？できたらいいな・・・。

《大森》

今回初めて広報出版部でしぶしぶ通信を担当して早いものでもう一年。広報出版部に入って正直なところすごく驚きました。原稿ができるまで、何度も集まり議論するのです。議論して理解した上で原稿を依頼するのですが、知識のない私は、毎号毎号ついていくのが大変でしたが、勉強になりました。日々、何の問題意識もなく過ごしていた自分に気づき、反省しました。そして、私自身ワーカーとしてどうあるべきか、考えさせられました。部員の皆さん、いろいろご迷惑をおかけしました。そして一年間お疲れ様でした。

《吉岡》



今年度、全般に渡って谷本部長が陰となり裏に回り、仕切っていた・・・といっても過言ではない広報出版部でした。そこが昨年度までとは一新して、支部広報誌としてはかなり完成度が高いと感じられたところではないかと思います。企画会議が長引き、話が1回で終わらないのが常であり、意識が遠のいていくのを何度も感じました。部の活動を通じて得たものといえば、やはり組織力や団結力といったチームプレーの底力を再確認できたことでしょうか・・・。コンセプトを明らかにし、部員全員で認識すること、そして役割を分担し各々が責任を持って遂行する、という仕事の基本のようなものを改めて実感できた活動でした。

《兵頭》

部員の

初めは広報出版部がこれほど忙しいとは思っておらず、「もうクビにしてほしい!」と思ったことも何度ありました。部会が始まる直前までテーマについて考え、考えても分からないことがたくさんありました。考えがまとまらないまま会議に臨んでいましたが、終わってみると毎回すごく充実していました。自分の中で変わったことは、今までわからないことがありすぎて「勉強しなければ」といつもあせっていました。しかし会議に参加するたびに、自然に「勉強しよう」という気持ちになっていました。今まで支部の行事等にほとんど参加したことはありませんでしたが、どこの勉強会よりも濃い内容を体験できたと思っています。日常の業務に終われていると、じっくり考える余裕は正直ありませんでしたが、今回広報出版部でじっくり考える場に出席できたことで得たものは非常に多く、本当によい経験ができたと思います。

《村上》

ぼやけといわれればぼやきます。このすばらしい通信、一体何人が読んでくれるのやら……。こうして書いている(当直中)最中に保健所からの入院依頼。夜間体制、保護室の確保、どれをとっても受けられない。あ〜つらい救急体制、移送、人権、生活支援、どれをとっても大変だ〜。

私が日々仕事する中で、なんとなく頭の隅にありながら深く追求する余裕もなく、緊急性もなく、そのままにしていることが多くあります。(それらが、仕事をする上でしっかり考えなければならないことと思いながら……)

しゅしゅ通信に何を取り上げるか、企画会議を重ねることがそれらの一部を考えるきっかけになったと思います。企画はもちろん、広報誌にどう取り上げるか下準備。自分の中できちんと理解できておらず、考えもしっかりしていないだけに大変なことでした。

みんなの意見を聞き、自分の考えを整理して自分のものにしていくことの大切さと大変さを改めて実感した一年でした。

《藤本》

ひとつと

頭から湯気が出そうなくらい力の入った部長に尻をたたかれながら、編集を進めてきました。始めれば4時間は覚悟しないとイケない企画会議。こんなに議論したのは久しぶり……。充実感もあったけど、しんどかった!!!でもその甲斐あって会員の方からそれなりの評価を頂きうれしかったです。全体的にはもう少し“遊び”があってもよかったかな、と思います。

一年経って編集のコツをつかんだところでそれを生かすためにも、部長にはぜひ来年度も引き続きやっていただけたらと思います。

活動を通してあらためて皆まじめに部の活動に取り組んでいるなあとは思ったのですが、支部活動のための活動ではなく、“自分にとって必要なやりたい活動”がどれだけやれているのかな……。と感じた一年でもありました。

《武崎》

精神科ソーシャルワーカーとして就職して1年目の私ですが、今年度の始め愛媛県支部に入会すると同時に、(自分で選択したものの……)何も分からないまま広報出版部員となっていました。これまでの特集を振り返ってみると、他職種問題、移送問題、倫理綱領……と、まだソーシャルワーカー駆け出しの私には、掘り下げていくことが難しい内容ばかりであり、なかなか実践に結びつけながら捉えていくことができず苦労しました。そんなこんなで他部員の方々に頼ってしまったことも多かったように思い、反省しています。

また、いろいろな方の思いや意見、同じテーマを持ってそれぞれの考えを話し合ったり、知ることは私にとっては大変勉強になるものとなりました。そしてその結果、一つの通信として完成し形になったことはうれしく、これからの自分の自信となったような気がします。

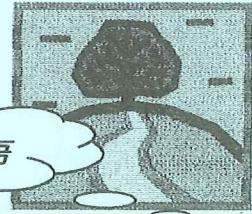
《前原》

集まる回数が最も少ない部会と信じて……。1年目は大いにサボり、2年目は他の部会に変わるつもりが再び広報出版部に所属と決められ(?)しゅしゅ参加。こうなったら1年間はまじめにご奉公しなければ“女”じゃないと叱咤激励して今日までついてきました。人生経験だけは歳の数だけ持っただけのもの、精神保健福祉の世界は少ししかじった程度の頭では見るもの聞くものが新鮮すなわち難しく、やることなすこと全てに忍耐が必要となりました。おかげでパソコンも上達し、ディベートにも慣れてきました。部長色が濃厚かな!と感じることはありましたが、立派な“しゅしゅ通信”を手にした時には「さすが熱心な部長のリードがなければここまではできなかった」と思う今日です。最後に一言“後が大変かな〜!”

《宮本》

一年を振り返って

部長 谷本圭吾



今年度の広報出版部の部長をと言われた時、かなり躊躇しました。しかし、引き受けることにし、やるからにはできる限りのことをと決心しました。

『しぶしぶ通信』を編集するにあたり、全員で力を合わせてやれる体制にし、他人事と思わず自分のこととして取り組めるように、『しぶしぶ通信』完成に行き着くまでの試行錯誤が大切だ。自分なりに勉強して議論して意見を出せて初めて体験としての自分の理論を組み立てられる、自分も含めてそれを通して実感できるような活動にしよう。苦勞したけど充実感が感じられたと思える活動にしよう。それが伝わるまで、最初はうるさかろうが、いやだろうが、話を聞いてもらおうと決めました。

活動の方針として決めたのは、会議に臨む前に全員が考えをまとめ自分なりの意見をもってまとめておくこと。担当制により各自が責任を持って進めること。各自がまとめたことに対する修正意見を全員が持ち寄ること。納得がいくまで議論すること。部員の皆さんが書かれているように、さぞ企画会議に出てくることが苦痛だったと思います。それでもよっぽどのことがない限りまじめに出席してもらい、最後まで付き合ってくださいました。

特集を組むことにしたのも、一つの問題に対して何を伝えたいのか、編集部として何を主張し問いかけるのか、ということ十分に吟味してもらいたかったからです。部員の皆さんが、このテーマは？と提案してくれるのですが、こちらがそんな大きな問題に取り組むの大丈夫かな、問題点を絞っていきけるのかなと心配なくらいでした。(みんな取り組んでみてその大変さを実感されたようですが・・・)修正を求められた一字一句に“この言葉の裏にはこんな意味がこめられているんだ”との説明から議論が進み、ひとことのために一時間などということも珍しくありませんでした。

広報出版部だけ何でこんなに議論しなければならないのですか？との疑問も当然投げかけられましたが、テーマを絞り、考え、持ち寄り、議論した結果として、調査研究部は“調査→結果の分析報告”があり、地域部には“地域部会”があり、研修部には“定例会、研修会”があり、広報出版部には“しぶしぶ通信”がある。求められる結果は別としても、どこの部も同じ経過をたどらないと結果は出ないし、その経過を大切にしたい。広報出版は、“よりよい『しぶしぶ通信』”を作る、ということなど考えなくても、やることをやったら結果はついてくるものだということを話しました。支部活動をしているとこの部員も同様な努力をされています。

しかし出来上がったものを見て、ああ苦勞した十分の一も表現できていないな、これで伝わるのかなと、いつも心配でした。役員会から二度の感想批評を頂き、みんなの思い、苦勞は伝わっているんだなとホッとすると同時に、ちょっと誉められすぎやろと気恥ずかしくなりました。

この一年間、部員全員がうるさい部長から逃げ出さずやり遂げてくれたことに感謝しています。初めは部長がしゃべるとシーンとなっていた企画会議も、待たずとも意見が戦わされるようになりました。“部員のひとこと”を読ませてもらい、一年経って自分が伝えたかったことが伝わったのかなとホッとしました。(しかし、つらかっただろうな、苦しかっただろうな・・・)でも部長も根っから好きでやっていたのではなく、必死で自分に鞭打ちながらやっていたのですよ。おかげで私自身もすごく成長できたと思っています。今まで経験したことのない一年でした。パソコンも最初の編集で使い始めたワードでしたが、自在に使いこなせるようになったのも広報出版部の活動のおかげだと思います。

一年限りといわれ全力投球したつもりですが、もう一年とのお達しが・・・。
ぼくを部長にしとくと広報出版部志望がいなくなりませんか？(また長々と書いてしまった・・・)